

1:26 さて、その六か月目に、御使いガブリエルが神から遣わされて、ガリラヤのナザレという町の一人の処女のところに来た。

1:27 この処女は、ダビデの家系のヨセフという人のいいなずけで、名をマリアといった。

1:28 御使いは入って来ると、マリアに言った。「おめでとう、恵まれた方。主があなたとともにおられます。」

1:29 しかし、マリアはこのことばにひどく戸惑って、これはいったい何のあいさつかと考え込んだ。

1:30 すると、御使いは彼女に言った。「恐れることはありません、マリア。あなたは神から恵みを受けたのです。」

1:31 見なさい。あなたは身ごもって、男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。

1:32 その子は大いなる者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また神である主は、彼にその父ダビデの王位をお与えになります。

1:33 彼はとこしえにヤコブの家を治め、その支配に終わりはありません。」

1:34 マリアは御使いに言った。「どうしてそのようなことが起こるのでしょうか。私は男の人を知りませんのに。」

1:35 御使いは彼女に答えた。「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。それゆえ、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれます。」

1:36 見なさい。あなたの親類のエリサベツ、あの人もあの年になって男の子を宿しています。不妊と言われていた人なのに、今はもう六か月です。

1:37 神にとって不可能なことは何もありません。」

1:38 マリアは言った。「ご覧ください。私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおり、この身になりますように。」すると、御使いは彼女から去って行った。

<説教>

今日の聖書箇所は、「受胎告知」として一般にも有名な場面です。

〈御使いガブリエルが神から遣わされて、ガリラヤのナザレという町の一人の処女〉(26) マリアの所に来て、彼女がイエスを身ごもり生むということを告げ知らせました。

マリアは〈ダビデの家系のヨセフという人のいいなずけ(婚約者)〉(27)で、年齢は12歳ぐらいだったと伝説では言われています。

〈ナザレ〉は「ナザレから何が良いものが出るだろうか」(ヨハネ 1:46)と人々から言われていたように、大したこともない、むしろ人からは低く見られていた町でした。

結婚相手の〈ヨセフ〉も、〈ダビデ〉というイスラエルで一番偉大な王の〈家系〉とはいえず、普通の、むしろ貧しい大工でした。

そのマリアに向かってガブリエルが、〈「おめでとう(直訳「喜びなさい」)、恵まれた方。主があなたとともにおられます。」〉(28)と突然言ったのです。

この思いもかけない出来事、御使いの言葉に、〈マリアはこのことばにひどく戸惑って、これはいったい何のあいさつかと考え込んだ〉のです。

いきなり「喜べ」と言われても、「恵みを受けた」と言われても、「主があなたとともに

にいる」と言われても、その理由が全く分からず、反対に恐ろしくなりました。

昔ガブリエルがダニエルに現れたとき、ダニエルもおびえ、地にひれ伏し、気を失い、「終わりの憤りの時に起こること」を知らされて病気にさえなりました(ダニエル書 8 章)。

それで、「恐れることはありません、マリア。あなたは神から恵みを受けた(直訳「見つけた」)のです(から。)」と〈御使いは彼女に言〉いました。(30)

だから、あなたが〈神から受けた〉〈恵み〉を〈見なさい〉(31)と御使いは言います。

〈神から受けた〉〈恵み〉とは、マリアが〈身ごもって、男の子を産〉むことでした。しかも、その〈男の子〉はただものではありません。

名は既に神によって決められていて、彼の名を〈イエス(「主は救い」という意味)〉と〈つけなさい(直訳「呼びなさい」)〉と御使いは言います。

そして〈その子は大いなる者となり、いと高き方の子と呼ばれます。〉(32a)と言います。

〈いと高き方〉とは神のことに他なりませんから、マリアが産む子は「マリアの子」つまり人間であると同時に「偉大なる神の子」つまり神だと御使いは言うのです。

更にマリアが産む子は、マリア個人やマリアの家庭だけに関わるものではありません。

〈また(これは「しかも」と訳してもいいと思いますが)神である主は、彼にその父ダビデの王位をお与えになります。彼はとこしえにヤコブの家を治め、その支配に終わりはありません。〉(32b-33)

マリアが産む男の子〈彼〉は〈ダビデ〉を〈父〉とする「ダビデの子」であり、故に〈神である主〉が彼にダビデの〈王位〉を〈お与えになり〉ます。

〈ヤコブの家〉とは要するに神の民イスラエルのことですが、当時からおよそ 1000 年前にダビデ王が治めていたイスラエルは、ダビデの子ソロモン王の後に南北二つの王国に分裂し、どちらも〈神である主〉に対する王と民の不信仰、不従順の故に神のさばきを受け、滅ぼされてしまいました。

しかし、今度新しく再び〈ヤコブの家を治め〉る王である〈彼〉の〈支配(別訳「王国、王権」)〉に〈終わりはありません〉と言うのです。

マリアが産む男の子、〈イエス〉と呼ばれる「偉大な神の子」は、〈神である主〉に完全に信頼し、完全に従順であられ、ダビデの子として永遠に神の民(ご自分の民)を、その不滅の王国を支配する王なのだ、と御使いはマリアに告げ知らせたのです。

この告知を聞いたマリアは、初めのひどい戸惑いや恐れはなくなったように思われます。

マリアは—12 歳の若者(?)らしく—とても単純、素朴に御使いに聞きました。〈「どうしてそのようなことが起こるのでしょうか。私は男の人を知りませんのに。」〉(34)

それに対して御使いも単純にずばりと、「それは全く神の力によるのだ」と答えました。

〈「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。それゆえ、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれます。見なさい。あなたの親類のエリサベツ、あの人もあの年になって男の子を宿しています。不妊と言われていた人なのに、今はもう六か月です。神にとって不可能なことは何もありません。」〉(35b-37)

〈臨む〉とは「襲う」(11:22)、「迫り来る」(ヤコブ 5:1)といった非常に強い言葉です。

〈おおう〉とは神の臨在の雲がおおう、包むという言葉です。(9:34)

ヨセフと一緒にいない〈処女〉マリアに聖霊が力をもって臨み(使徒 1:8)、〈主があなたとともにおられる〉(28)が故に、マリアが自分の子(人の子)であると同時に〈聖

なる者、神の子と呼ばれ)る子を身ごもり産むことに何の難しいことはないと言うのです。

更に御使いは“超”高齡の身近な〈親類のエリサベツ〉の例を挙げて、「神にとって不可能なことは何もありません」とはっきりと断言しました。

その言葉をマリアは単純に素直に受け入れ、神から恵みを受けたこと、喜ぶべき理由がわかり、〈「ご覧ください。私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおり、この身になりますように。」〉と答えました。

この場合、神はマリアに相談してマリアの承諾を受けようと御使いをお遣わしになったのではなく、ただ神の側から一方的に、マリアが頼みもしないのに神がマリアの身に起こすことを計画し、みこころの通りに行動なさることをお知らせになったのです。

御使いを通して神はそれを「喜びなさい。あなたは神の恵みを受けた。今もこれからも受けるのだ。恐れることはない。」と言われたのです。

マリアは神が自分の身になさろうとしていることを初めて、突然に知らされて初めは〈ひどく戸惑い〉〈恐れ〉ましたが、神の使いの言葉を受け入れて「私は主のはしため(奴隷)です。どうぞ、あなたのおことばどおり、この身になりますように。」と神への信仰の従順を告白したのです。

マリアは「神に不可能でなくても私には不可能です。」とか「神に困難はなくても私には困難です。」などと言って自分に対する神のご計画を拒むことをしませんでした。

2020数年前に神がマリアの身になさったことは今の私たちのためでもありました。

「聖霊によりて宿り、処女マリア生まれ」なさった神の子、主イエス・キリストが私たちのうちにも霊的に「聖霊によって宿」ろうと迫って来て(到来して)おられるのです。

神は今日、私たちに「喜びなさい。恵まれた者よ。主があなたとともにおられる。」「恐れるな。あなたは神から恵みを受けたのだ。」と語っておられます。

私たちは「私は主のしもべです。どうぞ主のみことばどおり、この身になりますように。」と信仰によって素直に応答するほかないのです。